

会 長 挨拶

会長 深 山 明 敏

この春、私共は防衛大学校卒業60周年を迎えることになりました。

そこで、今回の会報は記念特集号として企画させていただいたところ、國分良成・防衛大学校校長から素晴らしいご祝辞を賜り、また同期生多数の投稿や「防衛大学校十年史」及び「アサヒグラフ」などの貴重な資料の提供を受け、お蔭様で久里浜に入校以来、現在に至るまでの各種の内容を集大成することができたことに、先ず感謝申し上げます。

昭和28年4月の入校任命者399名のうち、既に鬼籍に入った仲間が3分の1を超えており、物故者のご冥福、並びに健在者の一層のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます。

幸か不幸か、私共は教育制度の丁度変換期に育ち、国民学校の最初の生徒、戦後の6・3・3制に移行した当初の新制中学に入校し、大学も1期生という不思議な巡り合わせに何か宿命のようなものを感じています。

特に、保安（防衛）大学校は、過去の陸・海軍の教訓に基づき新たな視点で創造の途に就いたばかりだっただけに、戦後の混乱した世情・復興の流れの中で、一部の国民から冷たい・厳しい目を向けられながらも、榎校長の透徹した教育・指導方針の下、全職員と学生が一緒になって、あるべき姿を求め、お互いに暗中模索の日々を過ごした思い出の多い生活でした。

そして、卒業後も今日に至るまで、訓練を除けば銃・砲弾の発射や被爆の機会もなく、わが国の平和と発展に多少なりとも貢献できたのではないかと誇りを持つことは有難いことであり、感謝しております。

「大いなる精神は、静かに忍耐す。」と当時の林・統合幕僚会議議長が訓示で述べられたように、私共は多かれ少なかれ各種各様の「忍耐・我慢」を強いられる場面を経験してきた人生であったと思います。

昨今、わが国周辺の安全保障環境の悪化、トランプ政権誕生に伴う防衛費増額の要求などの外圧をむしろ好機と捉え、国家再生を期することも大切だと思います。即ち、榎校長の先達である福澤諭吉先生が明治維新当時に強調された「独立自尊」の気風・気品を一人ひとりが高め、国際秩序の構築に寄与すること、並びに日英同盟の教訓に学ぶことが求められているのではないかと考えるからです。

1期生会は、3年後に組織的活動を閉じようとしていますが、平均余命によれば、まだお元気な仲間も多数健在ですから、いつまでも心豊かに充実した余生を過ごして行きたいものと念じています。

卒業60周年を記念して・・・防大の原点に学ぶ

防衛大学校 校長 國分良成

本年3月、本校第1期卒業生の皆さまが卒業60周年を迎えられますこと、ここに防衛大学校を代表して衷心よりお慶び申し上げます。

皆さまが当時の保安大学校に入校されたのは昭和28年4月、つまり1953年であります。

偶然にも、私も昭和28年生まれですので、皆さまが入校された年に私はこの世に生を受けたこととなります。防大で言えば、私は20期相当となります。

これも偶然と言えそうですが、私は榎智雄初代学校長が教鞭をとられた慶應義塾大学法学部の出身であります。私は榎先生の足元にも及ばないことを自覚していますが、近づく姿勢と努力は怠らないようにしています。防大校長就任以来、事あるごとに榎先生の語られた言葉の数々をひもとき、そのたびに心を新たにしております。私自身は榎先生の警咳に直接に接したことはございませんので、残された言葉に触れるしか手立てがありません。それでもいまなお、それらを通じて、当時の自衛隊と防衛大学校に対する厳しい時代風潮の中で、榎先生が固い信念とバランス感覚にもとづいて、いかに勇気と英断をもって学校運営に当たられたかを痛切に感じることができます。

この数年、私は榎先生の慶應時代の足跡に大きな関心を抱いております。なぜ、榎先生があれほどの熱い思いで防大建設に心血を注がれたのか。その動機はどこにあるのか。先生が防大校長に就任されてから以降の記録は多く残っており、そうした問いに対する研究や論評もこれまでいくつかあります。私の関心は、防大以前の慶應時代における榎先生の経験の中に、その後防大校長として全身全霊を捧げる要因があったのではないかとこの点であります。

この問いについて、私はすでに一定の解答をもつに至っております。それについては、昨年12月に慶應義塾大学の三田演説会において披露させていただきました。福澤諭吉は、日本社会にディベート文化を導入すべく、わが国初の演説館を三田に造りました。現在、重要文化財となった三田演説館では年に数回演説会を開催していますが、そこで昨年12月、「防衛大学校と慶應義塾」と題してお話をさせていただきました。それは慶應義塾の機関誌『三田評論』の今年の2月号に掲載されています。その結論は、以下の3点に集約することができます。

1. 榎智雄は、防衛大学校において、戦後の民主主義体制の中で陸海空を統合した、きわめて斬新な士官学校を創りあげた。英オックスフォード大学での経験が豊かな榎は、全寮制生活を軸に広い視野、科学的思考、豊かな人間性を育成することに主眼を置いた。ここでの学生生活は、自由と規律の厳格なバランスが求められ

た。それはいわばリベラルアーツ・カレッジともいえるもので、将来の幹部自衛官としての知性、体力、精神力を備えた人間の土台を作ることに最大の目的があったといえる。

2. 榎智雄のこのような思考と行動には、慶應義塾における一つの辛い経験が背景にあった。榎は小泉信三慶應義塾長時代の常任理事（副塾長）として、昭和8年（1933年）から戦後小泉塾長が退任するまで学校運営の中心にいた。榎常任理事の仕事は多岐にわたるが、主たる仕事は日吉キャンパス建設であり、そこに予科と工学部を設置することであった。榎は校舎から体育施設の建設にいたるまで責任者として切り盛りしたが、何よりも心を砕いたのは学生寮建設であった。つまり榎の描いた大学予科は英国式のリベラルアーツ・カレッジであった。しかし戦争末期、海上にいれなくなった帝国海軍が司令部を日吉キャンパスに移動させた。そのため、日吉は米軍の爆撃対象となって破壊され、榎の描いた新キャンパス構想は頓挫した。晩年、榎は「慶應でやれなかったことを防大でやった」と述懐しており、その言葉の意味は以上のような慶應での経験にあった。
3. 防衛大学校には、小泉信三と榎智雄という二人の人物を介して福澤諭吉の精神文化が注入されている。福澤は一貫して国家官吏となることなく、民間人としてその一生を終えた。しかし福澤は明らかにナショナリストであった。彼は合理主義と抵抗の精神を持ったナショナリストで、自立した個々の市民を作ることによって立派な国家が存立すると考えた。福澤の『学問のすすめ』の中の有名な言葉、「一身独立して一国独立す」「独立の気力なき者は、国を思うこと深切ならず」、これが福澤の本質であった。榎智雄は自身の研究の中でもしばしば国家と個人の関係について論じているが、その原点はまさに福澤にあった。榎は小泉を心から尊敬していたので、小泉から学んだ福澤精神を自然に防大に注入したのかもしれない。そうした意味で、防衛大学校は「防衛義塾」ともいうべき日本で唯一無二の大学である。

以上が、私の講演の要旨です。防衛大学校の今日の雄姿は、榎智雄先生の思いを原点に、一人一人の学生と卒業生がこの学校建設に思いを込めて創造してきた一つの結晶であります。そうした防大の原点創造に参画された第1期卒業生の皆さまの存在と思いは、現在の防大を預かる我々にとっては何にも代えがたい宝であります。今後とも、歴史の証人として、我々に対して大所高所から様々な啓示をお与えくださいますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

最後に、改めて、防衛大学校第1期生の皆さまの卒業60周年に対して、心からのお祝いを申し上げます。

防大生に与ふ

元 内閣総理大臣 吉田 茂

独立国の国民として、国の独立程大事なものはなく、この独立を守る事こそ、国民としての名誉であり、誇りであり、この誇りが愛国心の基礎をなすものである。国民に独立を愛し、独立を守る決心なくんばその国民の存在はあり得ない。この決心が一国の興隆繁栄を来たすものである。第一次大戦の初め、パリがドイツ軍に、まさに占領されんとする時、首相クレマンソーは、国民に告げて曰く、「パリーの外で守り、パリーの内で守り、又、パリーの外において守るべし」と。仏国民にもこの決心ありたるが故に、破竹の勢ひを以って、攻め来たりたるドイツ軍を遂にパリーの外に退け得たのである。第二次世界大戦において、英国軍が仏白国境に敗れて、ダンケルクより三十余万の敗残兵僅かに身を以って英本国に引き揚げ、武器、弾薬、悉く大陸に遺棄し、国内には国を守る何等の兵備なく、ドイツ軍の英国侵入は時の問題と思われたる時、チャーチルは議会で演説して曰く、「英国内において敵を防ぎ、英国外においてこれと戦ひ、遠くカナダに退いてドイツ軍と戦ふ」

と云った。英国々民の戦闘意識を最も明白なる言葉を以って云い表したのである。クレマンソー及びチャーチルのこの決心がパリを守り、英国を守り得たのである。然しながら、兵は凶器である。これを用ふるは苟しくもすべきではない。又、これを用ふるにおいてはこれを止むる用意がなければならない。所謂、武なる文字は、矛を止むると書くのである。日露戦争の時、児玉総参謀長は、奉天会戦を以って日露戦争を終るべき時なり、と大本営に進言して、兵を収めて日露戦役の功を全うした。この深謀遠慮ありてこそ武將と云うべく、然るに第二次世界大戦における我が軍は、その勇戦善戦、日露戦争に比べて優るとも劣る事なかりしにも拘らず、進むを知って退くを知らず、遠くブーゲンビル、ラバウルまで進出して徒に大兵を孤島に集中暴露して、日本本国との連絡用



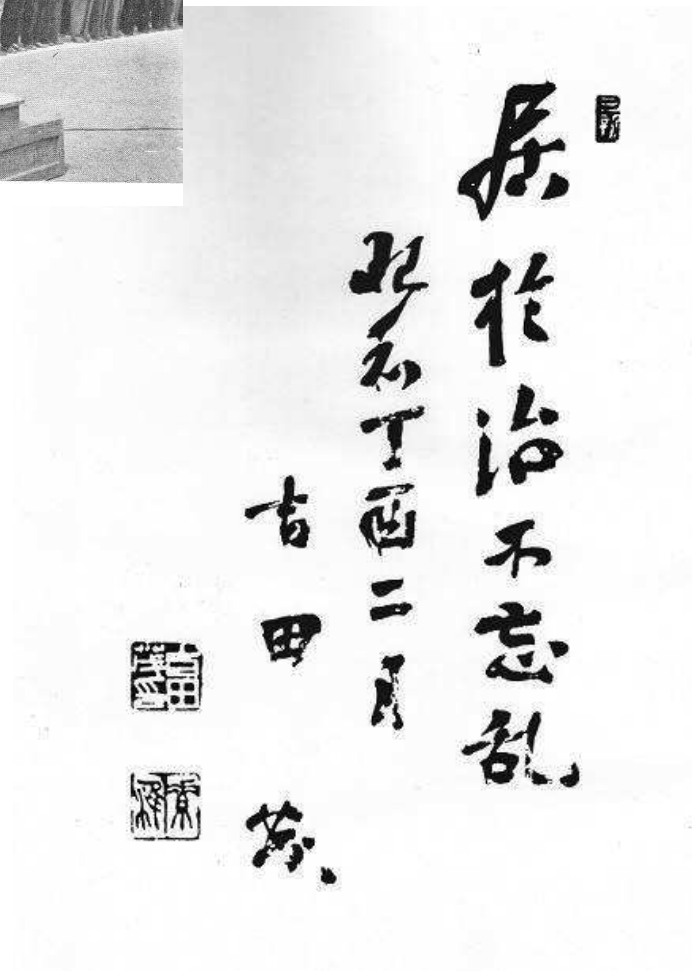
意なく、米軍のために我が艦船、飛行機等の壊滅せられるや、遂に本国との連絡絶たれて、大兵空しく、南洋海上の孤島に置き去りにされて全滅し、遂に南方作戦は頓挫した。歴史の示すところは、以って将来の戒めとなすべく、兵を用いて兵をとどむるの用意なくんば、善謀善戦も何の益するところなし。

兵を学ぶ諸君、常に茲に心を致されん事を望む。(昭和 32 年 3 月、雑誌小原台 7 号)

(出典 防衛大学校十年史)



吉田前首相



保安大学校第1期生 入校式式辞

昭和28年4月8日

保安大学校長 榎 智 雄

保安庁長官代理増原次長並びに来賓各位の臨席の下に本日保安大学校第1期学生の入校・任命式を行い得ましたことは、保安大学校教職員及び学生一同の無上の光栄と致すところであります。今日あるを得たのもひとえに本大学校創設計画以来の関係各位の絶えざる御尽力と支援の結果でありまして、このことは我々の心底深く銘記してその責任の重きを思い、職務に精励致す覚悟であります。

学生諸君にお話いたします。本日諸君をむかへましたことは、事実上の本大学校の発足であり、我々一同は心よりの喜びを禁じ得ないのであります。この大学校が将来有能にして忠誠なる多くの人材を輩出して、かがやかしい歴史を作るものと確信いたしますが、もしこのような想像が許されるならば、本日の入校任命式は真に意義深いものでありまして、今日の機会に遭遇したお互いの幸運をよろこばずにはおられないのであります。諸君が本大学校を志望し、今日この席に列せられたについては必ず慎重な考慮の結果決定されたことと信じます。その堅い決意と誠実に対して心強い信頼の念をいただくもので、4カ年の課程を終了して保安官並に警備官たるの初志を貫徹されんことを期待するものであります。我々はその生を受けたこの国と、その民族に無限の愛着と大きな誇を持つものであります。わが祖先はここ住み、かつ励み、我々に多くの遺産を残してくれたのであります。その伝統、文化、勤勉、不屈の魂と数えれば限りなく挙げることができましよう。長い間には何れの国にも消長があり、興隆衰退のあることは免れません。しかしその興るや必ずそこには理由があり、又衰うるやその原因も必ずあるのであります。我々は最近誠に悲惨な多くの労苦を重ねてまいり



ました。しかしすべての希望を失い、その誇を捨てるにはあまりにも強い自負の心の残るを如何とも為しがたいのであります。我々は心を新たにし国の興隆する原因を探究して、ひたすらこの途に励みたいのであります。わが国民はいわば運命を共にする船中であって、航海を続けるようなものであります。いつ火を發し浸水を招くか、全く予知しがたきものがあります。これは平和を念じ、その郷土と文化を愛する国民の一日たりともゆるがせになし得ないことでありまして、災難に際して立向う忠誠の心なくしては、かかる災難を防ぐことは絶対に望み得ないのであります。国が諸君に要請するところも、また国民の諸君に期待するところも危急に際しての、人としてまた国民としてのかかる忠誠の心であると考えております。

諸君の眼前に拓がる今後4年間は、保安大学校における諸君の希望の歳月であります。これは諸君にとって大切な年月であるとともに、実に国民にとっても希望か、失望かの日々であります。その成否は独り諸君の問題であるばかりでなく、国民の立場よりすれば、その期待が報いられるか否かの重大事なのであります。我々はこのことを常に記憶せねばなりません。而してこれに応うる途は種々挙げることかできようと思いますが、我々は今日特に二つの点を考えて見たいと存じます。

第一に諸君の任務は偏することなき均衡のとれた人物を要求していること、第二に諸君の任務は民主制度に対して的確ご理解を要求していること、これであります。

第一の点であります。諸君が有用な国民の一員であることと、教養高き社会人たることを心がけねばならぬは勿論であります。4ヵ年の諸君の課程を、我々は三つに要約して考えております。すなわち一つは人としての修養練成であり、他の一つは工学及び保安、警備の学問に関する基礎知識の習得であり、さらに他の一つは指導統率の資格を具うることです。この三者はそのいずれかに偏することを許さぬものでありまして、常に均勢を保つことがその重要な条件であります。いかに学問技術の造詣に深くとも、人としての性格や指揮する材幹において欠くことあれば、本大学校に履修せる目的の大半は失われるのであります。また人としてすぐれていても技術上の能力が劣るならば、かかる人は今日の有能なる指揮官として期待することは困難でありましょう。

さらにその修練学修の態度についても一言述べますが、これも均衡のとれた態度を必要とします。学理を無視する、または冷静な判断を欠く、徒らなる興奮や、狂信的な行為は我々の絶対にとらないところでありますが、さりとして信念のない修業の態度にも賛

成しないものであります。要は諸君がその将来の任務の重要性と、その責任及び名誉を自覚して、強い意志の力をもって錬磨することであります。

我々の心よりの願いは、諸君の修養や学業の結果が一つの信念となって諸君の生涯を通じて役立ち、諸君の学校の選択が誤りでなかったことを証し得て、そのことに大きな誇を感じていただきたいのであります。

お話したき第二の点は、諸君が民主主義に対して正確な知識をもっていただきたいこととであります。本大学校は諸君の責任感や名誉心について大きな関心を持つものでありますが、また規律や服従の精神についても、同様に重大な関心を待つものであります。民主主義と服従の精神、或は自由と規律と言うがごときことは、おそらく諸君には撞着矛盾の言葉と響き、不思議の感じを持たるるであります。しかし実際には規律なくして真の自由はなく、遵法精神又は正義に服従する思想なくして真の民主制度は成立いたしません。御承知のとおり、個性の尊重は近代文明の基礎であるとともに、その大きな推進力でありました。個人に蔵せらるる創意と発現の力が近代の人類生活に大きな変革をもたらしたことは、今更述べるまでもありますまい。我々は個性の発展を重視するとともに、大きな期待をこれにかけるものであります。諸君の個性の発展が我々の最大の関心事であることば申すまでもありません。しかし我々のいう個性は野放しのものではなく、また個人の自由は放縦を意味するものではありません。簡単に言えば、正しきことを目指すことにおいてのみ個性の発展があり、正しき行いにおいてのみ自由があるのであります。社会は一つの約束の下に行ってならぬことを抑制し、あるいは禁止し、また行わねばならぬことを奨励し、あるいは命ずるものであります。この約束を作るのが世論であり、あるいは国民の総意と呼ばれるもので、我々の道徳的拘束となり、あるいは法律となり、道徳的服従とか遵奉精神となって現れるのであります。このようにして命令服従の関係が合理的に成立したときに民主主義が実現されるというべきでありましょう。すなわち命令を発して正義の信念に何のくもりもなく、服従して我々の個性や自由に何の矛盾も感じないのであります。

このような考え方は国民全体にとって共通の問題であることは言うまでもありません。しかし諸君にとってはその任務の関係から特に考えるべき理由があるのであります。即ち指揮統率に関することとありまして、諸君の義務の遂行には常に命令及び服従の関係が伴うものでありまして、最も注意深き研究と錬達を必要といたします。今後4ヵ年

間の大学校生活において、規律および服従の神髄を体験されんことを望みます。服従のみ存在して自由や個性尊重が認められないならば、それは奴隸的關係でありまして、近代文明の許し得ないところてあります。また自由のみ存して服従のない社会かあるとしたら、それが夢に画く国でなければ、恐らくは無秩序混乱の社会でありましょう。いやしくも共同生活の営まるるところ、規律なくして自由の生活はありません。この点は諸君の任務上本大学校において習得さるる重要な教課の一つであります。

今日諸君は国の要請によって入校・任命を受けました。その要請された目的に対して努力すること、諸君の自由なる道徳的義務とは一致するのであります。その任務を尽す



ことによって、諸君の個性はいよいよ光輝を増すことでありましょう。諸君の入校の決意に対して、我々は万こうの敬意を表するものであります。またその誠実に対して全幅の信順を寄することを再び申します。我々また誓って諸君の誠実と希望に応えたいのであります。今日よりの諸君の生活は日を追って意義あ

るものとなりましょうし、またすべての青年の特権である旺盛な元気と、高き希望に燃えあかることでありましょう。我々の念願は諸君がその決意をいよいよ固くして、やがてこの学校を選びしことを無上の喜びであるとし、また我々も諸君を得たことを無上の誇りとしたいのであります。以上入校・任命式に当たって所感の一端を述べました次第であります。

(出典 防衛大学校十年史)

防衛大学校第 1 期学生卒業式における式辞

(1 期生の歩んできた道)

昭和 32 年 3 月 26 日

防衛大学校長 榎 智 雄

小滝防衛庁長官、吉田元内閣総理大臣並びに内外朝野多数の来賓を迎えまして、本日防衛大学校第 1 期生の卒業式を挙行いたしますことは、卒業生はもとより、本校職員及び在校生一同の無上の光栄と致すところであります。来賓各位に対しまして、一同を代表し、その感激と感謝を心より申しあげる次第であります。

第 1 期生は昭和 28 年 4 月入校以来、4 年の教育訓練を終了し、卒業と同時に幹部候補生として、各自衛隊に配属さるる運びとなりました。今日の卒業に至るまで、歴代の防衛庁長官、歴代の防衛庁政務次官、防衛庁次長、統合幕僚会議議長、陸・海・空各自衛隊幕僚長、各付属機関の長ならびにそれぞれの庁内部局、部隊および機関に所属さるる各位をはじめとし、諸官署及び諸大学、官民の有志、米国軍事顧問団ならびに在日諸国大使館附武官、その他の方々より受けました支援、好意、激励は甚大のものでありまして、今日これを思うことなくしてこの挙式を致す事は不可能であります。またかつて本校にあつて、教育訓練にあたり、又は事務を管掌されし各位に対しても、深く感謝いたす次第であります。いちいち芳名を挙げてお礼を申しあげべきところ、時間の都合上、勝手ながら省略させていただきます。その御援助、御好意に対し衷心より謝意を現し、本校の永く記憶いたすところであります。

開校以来 4 年はまたたく間に経過しましたが、1 期生にとっては事多き期間でありました。この期間の教育は、前半 2 年は久里浜の仮校舎において、一昨年小原台の新校舎に移転の後はこの地において行いました。設備の未完成、学風伝統も未だしの感強く、終始準備時代を脱しなかつた時期に入校し、勉学を続けたのであります。行く手に希望



の光は見えても、なにか漠たるの感のあったことは免れず、周辺の事情も励みを与えるものとは言えなかったのであります。この間、1期生は物心両面の創設事業の先頭に立ち、はっきりせぬ境地に、行く先を開く開拓者となったのであります。このためには覚悟と勇気を要したことはもちろんであり、その決意と努力は高く評価さるべきであります。

学校は4年間に、その内容の是非はしばらく別として、その歳月だけの進展をしたことは事実であります。同時にこの進展は1期生の成長について語ることなくして、考慮し得ないところであります。1期生はもちろん学校より多くを受けました。しかし1期生は、学校に多くを残していくことも事実であります。それは学風伝統の基礎を造ったことで、その一つは「学生の習慣」とでも呼ぶべき風習を植え付けたこと、他の一つは積極自主の気風を生んだことであります。「学生の習慣」について見れば、規律のうちに生活する風習をつくり、これがなにを意味するかを知る機会を設けたことであります。理性ある服従に慣れることによって、秩序、正確、敏速の実現はもとより、組織ある行動の意義を知り、この学校を将来部隊幹部としての礼儀、態度、協力等幾多の適性を訓練する場たらしめたことであります。4年の共同生活において一応このような形態を整えたことであります。

次に積極自主の気風を生んだことであります。学生将来の任務には気力、体力、情操において、強さと気品を要望されております。その一例は校友会活動でありまして、乏しい時間の中に、「見物人ではなく、自ら行うものである。」との標語の下に、全学生が進んで体育活動及び文化活動に目覚しく発足したことで、その多種多彩なる活動のうちに自制の精神と敢為の風が、その端緒を開いたことであります。これはやがて本校学生生活に深く根をおろし、よき学風伝統を造るうえに大きな貢献をなすものと信じます。

「学生の習慣」と「積極自主」の気風を残したことは、ただに本校の学風伝統によき発端を与えたばかりではなく、このことは、卒業生諸君の将来の持場と、その責任の遂行に必要なものであります。すなわち責任遂行には、性格と意志の力を必要とします。知性あり、信頼するのに足る性格は、よき習慣の上に育成され、強い意思は積極自主の気風のうちに成長するのであります。責任ある任務は多々ありましようが、特に重い責任を果たすに当たって、その責任の解除される瞬間まで、全力を尽すことは、決して他力のよくなし得るところではありません。ただ強力なるおのれの性格と意思のみが、よく成就するところであります。米国海軍兵学校の広間の正面に、大きな額があつて「船を捨てるな」と筆太の文字で書いてあります。この筆法で行くならば、我々の場合「持ち場を捨てるな」というべきでありましよう。任務にいかにか強い性格と意思が伴わねばならぬかを、思わしむるものがあります。

いうまでもなく、防衛について、国民の念願するところは国土の安泰と、民族の文化及び民生の繁栄であります。わが民族は、その国土、言語風俗、歴史伝統を遠き昔より

うけ継いできました。長い間には浮沈隆替もありました。しかしその固有のすぐれた文化はもとより、我が国民の一路進歩を目指す熱意とその実現の可能に対する自信、殊にその努力勤勉については、われも誇りを持ち、他もまたこれを認めております。新しい文化、新たなる繁栄福祉に対する念願が湧き起り希望と自信に満ちているというのが、今日のわが国の状態であろうと信じます。

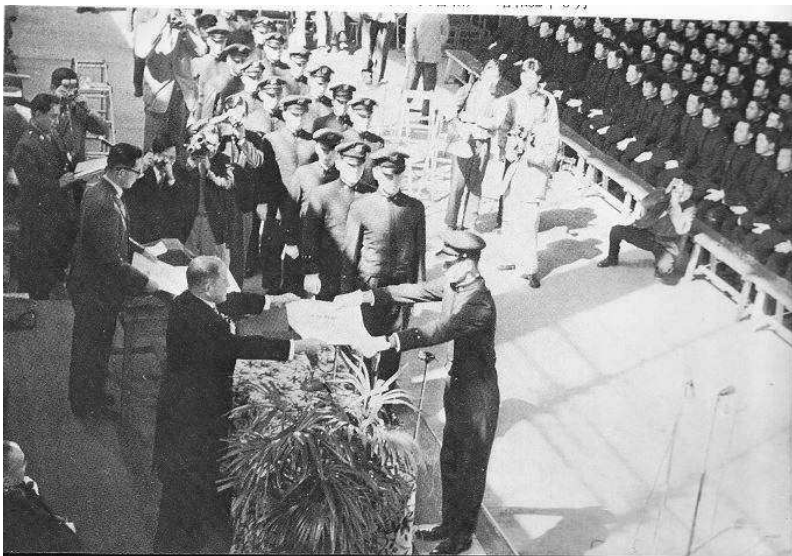
しかしこれは国の独立と民族の自由があつて、はじめて可能のことであつて、もしこの独立と自由が失われたならば、おのれの文化も、繁栄もなく、理想はもとより、人生に対する励みも起こることなく、民族は屈従の下に暗たんたる毎日を送るよりほかはないのであります。諸君の持場とその責任は、このような憂慮を国民と共に分かち合うことであり、その持ち場の責任の遂行は愛国心の発露であり、また愛国者の仕事なのであります。あるいはこのような憂慮は根拠のない、単なる杞憂に過ぎぬとして退ける議論があるかも知れません。しかし世界の各地には未だ正義人道が拒否せられ、平和が無視される状態が起りつつあるのであります。災厄と異変は思わざる時に思わざる形において突如として起り、今日の平和は、明日の混乱と化することは、あまりにもしばしば、広く人類の経験してきたところであり、よき準備、これが異変に対する最善唯一の対策であることは、疑う余地のないことであります。

国民とともに憂慮を分つ心は、諸君を進んで防衛の任務に参加せしめました。その心は称讃すべきで、これは諸君の大きな誇りであります。その使命は貴く義務は重いのであります。その義務を一言に尽くせば、遵法の義務、遵法の精神であります。国民の憂慮の念は、その総意となり、国会及び政府を通じて、諸君の任務の持ち場を定めたのであります。ここに政治上法律上の諸君の任務は明らかであり、国民の諸君におく信頼はこれを基として起こるものであります。遵法の精神とは次のことであります。すなわち意見は各人自由である。しかし国民の意思の一度決したときは、その定め誓つて従うという民主主義の精神は、国民の諸君に対する信頼の起こる第一歩であります。この政治上法律上の義務は根本的のものであります。しかし同時に国民はさらに深く道義的精神的の意味において、諸君に求むるものがあるのであります。高い水準に達せる社会は教養を重んじ、情操を尊び、節度を敬う感覚を持つものであります。修練の積まれた社会には、自由のうちに戒律がおこなわれ、自制と責任ある行為がなされ、人の威信が尊重されるのであります。ここにおのずと公に奉ずる精神がうまれるのであります。諸君は過去4年、一方に規律規則の生活を尊ぶとともに、他方積極自主の活動を重んじ、また一方には科学理論の学問を学ぶとともに、他方教養情操の習得に努めたのもこのためでありました。卒業後、直ちに必要なる専門職業的の教育訓練の時間を、許す限り割愛し、つとめて広い基礎的の学問を履修したのも、このためと、将来の進展を慮つたためでありました。すなわち諸君は国家の責任ある一員であるとともに人間社会の責任である一員でなければ、国民の信頼を受けることは困難であります。世界いずれの主要国も

防衛に当たる士官養成の学校を設けております。長い歴史をもつもの、新たに発足するもの、いずれもその教育について極めて熱心に絶え間ない研究を続け、過去の伝統に慎重であると共に、また時には思い切った改革も加え、人間社会の一員たるべき点については、特に考慮を払っております。数年前にハーバード大学は「自由社会の責任ある人間と市民」をつくるという目標のもとに、大学4年の課程を「一般教育」と称して、大胆な改革を行い、しかも、専門職業教育を可能ならしめております。このような戦後の風潮を見て米国土官学校では、これはすでに130～140年も前より同校の教育方針であったと称え、同校は、ただひとすじに専門的な初級士官の養成にのみ没頭してきたのではなく、教養高き人士を養成したと主張しております。防衛大学校と同様の目的を持つこの種の学校の卒業生は先ず愛国者であります。その言葉の意義は広いものであって、正義人道の勇者でもあり、擁護者でもあり、また正しき平和の使徒でもあることを意味するものでありましょう。諸君に対する国民の信頼も、その根ざすところ深く、人間社会の教養に期待することの多いものであることを忘れてはならないのであります。

諸君は今日より、人生の新たなる行路に踏み出します、ここに国に尽くし、世に役立つ意義ある生涯が始まるのであります。その教育訓練課程はいよいよ専門に入って、諸君の重大な使命のために、一層の努力を要求することでありましょう。諸君の備える立派な資質は十分にこれに応ずることのできるものと信じます。多くの先輩の下に、また多くの同僚の間であって、常に謙譲であり、常に積極的に協力せられんことを希うものであります。

今日の卒業式を迎えわれわれ防衛大学校の教職員、在校生一同は諸君の前途幸多かれと祈り、人生への熱意と勇気のいよいよ高からんことを念ずるの情の切なるものがあり



ます。諸君はわれわれに多くのものと、貴い記憶を残して去って行きます。われわれ一同は諸君に対し大きな誇りと期待を持つものであります。

終りに臨み、再び今日の第1期生卒業式に臨席くださいました来賓各位に対しまして、衷心よりお礼を申し述べ、この式辞を終る次第であります。

(出典 防衛大学校十年史)

経過報告（防大 10 周年行事における報告）

副校長 鈴木 桃太郎

本校設立以来 10 年間の経過の概要を御報告申し上げます。

本校は、保安庁法に基づき、昭和 27 年 8 月 1 日保安大学校として発足し、同月 19 日初代校長榎智雄が発令されました。同年 12 月第 1 回の学生募集を行ない。応募者総数は 11、619 名でありました。昭和 28 年 4 月 1 日横須賀市久里浜駐屯部隊の施設の一部を仮校舎として開校し、同月 8 日に第 1 期学生が入校いたしました。昭和 29 年 6 月保安庁法に代わって防衛庁設置法が施行されるに伴い、同年 7 月防衛大学校と改称され、今日に至っております。昭和 29 年この小原台の地に校地をとり、校舎並びに諸施設の設備を始め、昭和 30 年 4 月に移転を完了いたしました。その後校地、校舎も年々増加し、現在の敷地 215,010 坪、建物延 26,510 坪であります。



学生の数、当初毎年陸上要員 300 名、海上要員 100 名、計 400 名で発足いたしましたが、昭和 30 年 4 月入学の第 3 期生より前述の各要員に航空要員 130 名を加え、現在 1 学年の定員は 530 名となっております。こえて昭和 32 年 3 月に第 1 期生を卒業生として送り出し、本年 3 月第 6 期生が卒業して卒業生総数は 2,645 名に達し、夫々各自衛隊の中堅初級幹部として活躍しております。これに在校生総数 2,006 名を加えますと、発足以来過去 10 年間に実に 4,651 名の教育訓練を実施してきたこととなります。

昭和 36 年 6 月防衛庁設置法の一部が改正されて、本年 4 月より入校定員 22 名、修業年限 2 年の理工学研究科の設定を見、現在電子工学課程学生 19 名の教育を実施しております。これを所属機関別に見れば陸上自衛官 8 名、海上自衛官 2 名、航空自衛官 4 名、自衛官以外の自衛隊員 5 名となっております。

更に本大学校は、昭和 33 年 5 月法律改正により、外国人留学生の教育を実施することとなり、タイ国より同年入学の第 6 期生に 1 名、昭和 35 年入学の第 8 期生に 1 名の留学生を受け入れました。

現在本校在職の職員は、教官 254 名、自衛官陸・海・空あわせて 254 名、事務官等 422 名、計 930 名であります。

本大学校は、その設立の目的にも示されているように、将来陸・海・空各自衛隊の幹部自衛官となるべきものを教育訓練する機関でありまして、学生に広い視野と伸展性のある資質を与え、科学的に訓練するとともに、国家に対する責任感の強い幹部自衛官を育成することを一貫した教育方針としております、この方針に則り、教育課程においては、大学設置基準に準拠して、一般教育、理工学及び防衛学に関する学理とその応用を授け、幹部自衛官として必要な基礎的学力及び能力を育成するとともに、訓練課程においては、自衛隊の必要とする基礎的な訓練要項について錬成し、幹部自衛官としての職責を理解して、これに適応する資質および技能を育成しております。また、学生の生活を通じての精神的、肉体的指導については、学生舎における生活を通じてこれを行なうとともに、他方、学生全員の参加する体育活動及び各種の運動競技を奨励することによって、個人及び社会に対する義務、責任の観念を養うとともに、強健な体力と旺盛な気力を育成するようつとめております。

以上の趣旨に基づき、教育関係においては、初期開設の機械、電気、土木、化学の 4 専攻の外に昭和 30 年航空、応用物理の二つが加わり現在 6 専攻となり、このほかに今年より研究科 1 専攻が加わりました。

教官陣も年とともに量、質ともに充実し、現在教官定員の 88.5 パーセントを充足し、そのうち博士の学位を有する者の数は、現在約 90 名となっております。

訓練関係においては、第 1 学年においては陸・海・空の区別なく訓練を課し、第 2 学年以上においてそれぞれ三自衛隊要員に配分され、それに伴って多少異なった訓練を受けるようになっております。訓練の主力は、これを一般大学の休暇時におき、部隊実習、乗艦実習、航空基地実習等 1 学年に 6 週間をこれに費やしております。

施設の主なものをあげますと、蔵書約 10 万冊を有する図書館、80 名を同時教育できるオラル・アプローチ法による語学実習室、高電圧実験室、ロケットエンジン実験室等を数えることが出来ます。その他の施設整備についても年とともに内容を充実整備し、今や旧制大学と比肩の域に達しようとしつつあります。一方訓練体育の施設についても、近代設備を誇る体育館、日本水泳聯盟公認のプール、舟艇大小合わせて 58 隻を擁する 11,200 平方メートル (3,384 坪) の海上訓練設備等逐次完成を見てまいりました。生活環境についても学生舎の増強、厚生施設の充実、職員官舎の拡充等、見るべきものが多々あります。

以上に要した費用は、施設整備関係概算約 18 億円、設備関係約 11 億円で、学校維持のための経常経費現在約 11 億円であります。これらは、同程度の規模において、単に学問教育のみを行なっている一般大学に比較いたしましてかなり少ないものではあります。10 年と言う若い歴史を考えるならば、これは長足の進歩といえることができる

と思います。

以上が 10 年の歩みの概略であります。ここにいたるまでには、防衛庁関係部局、各自衛隊はいうにおよばず、国会、政府各機関、その他各方面のご懇切なる御指導御後援によって得られたものであり、ここにこれらの各位に深甚なる謝意を表しますことにより、私の報告を終わりたいと存じます。

(出典 防衛大学校十年史)

埋め草

思い出の小原台校舎



保安大学校第1期入校学生名簿

第32小隊天野靖一君ご母堂保管名簿より抜粋 平成29年1月14日

	第11小隊	第12小隊	第13小隊	第21小隊	第22小隊	第23小隊
1	荒海 巖	石原 隆	浅井忠夫	井上 武	上野秋生	岡 靖人
2	安藤輝一	磯谷幸三	池田 謙	河村末久	内田 溥	岡村忠重
3	安梅幸永	奥原廣人	今井信武	木原昌彦	梅根佐久郎	岡村光正
4	石松茂毅	清原 博	岩田一明	陸井益三	岡田 毅	笠松徹三
5	井上雅章	楠元敦之	浦川 正	小西岑生	小賀正条	金木祐亨
6	岩坪 宏	上滝 巖	小田原晃	小林英雄	大塚久信	神村明德
7	江戸 満	佐々木保	大黒 光	坂柳成功	川崎年夫	北原 明
8	江本俊雄	佐藤 正	河原正義	白石洋介	北村 博	北村揮一
9	岡 聡	七田真次	久保田裕士	城尾百男	小林泰義	清島日出男
10	大西知弘	四宮 勝	倉田光雄	杉浦修士	櫻井 茂	国枝金正
11	小原義造	菅原壽郎	後藤 理	鈴木喜一郎	佐藤 保	源川幸夫
12	北村哲三	高橋常清	小出雄一	砂土居彬	三宮啓典	鯉沼義則
13	熊谷新次郎	高山雅司	澤井隆秀	高橋房夫	鈴木吉高	後藤 薫
14	下田朔雄	遠茂谷博之	佐々木良	竹内 俊	高橋 弘	小林信雄
15	谷 功	富田定幸	才新基一	竹原幸一	竹之下憲弘	杉浦満寿男
16	高橋勲人	南任靖雄	志水秀文	田崎英之	田中 治	園川 清
17	難波清史	野島達雄	鈴木英夫	田沢正美	中 典之	田畑一朗
18	長尾 司	橋本彦三	高橋洋治	竹井 溥	中尾時久	遠山久人
19	中藪照之	浜田一信	竹内誠一郎	中村幹生	中田寿美夫	床井徹男
20	長野美和大	馬場駿快	田中康之	中津川秀明	中山 清	中部晋行
21	西成昭美	人見五郎	中島政弘	薮野俊一	長谷常俊	萩野昭朗
22	新居洋一	福本元康	西野彰泰	新津保義	畑田 勲	秦 政美
23	野田 洋	藤井尚昭	常本省三	西久保 剛	原田宣夫	藤戸誠三
24	菱田植樹	堀田哲朗	富田恂二郎	西田 晃	福田亮治	前田武彦
25	東 俊	星島 公	浜口守男	野村栄一	松本隆行	牧 康策
26	袋 昭彦	前川 清	樋口和彦	長谷部俊郎	宮川正四	松本信義
27	松島史尚	前田利昭	平井 進	林 孝恒	宮中正壽	松山省二
28	前原輝男	向吉長門	藤岡 隆	藤谷 隆	峯田信乃夫	溝江琢磨
29	前村義明	村上好和	馬渡利臣	細谷隼三	本宮哲郎	宮本 宏
30	松本 靖	村岡英之	森野安弘	松浦育郎	守屋義弘	矢田部稔
31	宮本直躬	山口 恰	森本文雄	松島 巖	山根正和	山崎秀夫
32	宮本隆一	米山治通	森園 繁	松本克彦	三浦 衛	山下昌宏
33	和才 剛	渡辺政直	湯浅 彊	山田和行	和佐田 昂	渡 正明
34			吉川圭祐	油井碩也		

	第31小隊	第32小隊	第33小隊	第41小隊	第42小隊	第43小隊
1	阿部博男	阿部順治	安藤堅一	甘利富重	伊藤政美	荒武良弘
2	安達勝明	天野靖一	石山 晃	伊左次達	今野克己	安藤雅章
3	青柳隆郎	石井忠司	大江 博	伊藤 茂	上野博雄	磯貝 武
4	石川 昭	内海澄夫	小野寺勇	稲垣 厲	内山実人	石塚鑛司
5	伊東靖郎	大島義久	小野 勇	上田愛彦	岡部義信	井上正一
6	上田誠也	香川武瑛	織田稔夫	大木 実	鹿島田矩基	伊藤 巖
7	遠藤 了	検見崎賢	河村和甫	大崎 皓	勝山 満	石原敬之
8	江沢陽二	小林茂昭	河合一郎	大村 了	河村和彦	上野 怜
9	小坂田芳也	小出智幸	加藤俊明	加来寿和	近藤一視	大橋丈夫
10	木村 隆	佐々木直	倉園貞夫	国武宮生	坂本文雄	大島直光
11	草島萬三	杉本泰隆	篠永茂夫	久保 彰	佐久間一	小野原亨
12	久保健二	鈴木昭雄	白木弘敏	好田一俊	佐藤芳夫	尾坪祐三
13	斎藤元行	末次信正	住田 剛	小西 忠	志摩 篤	銚谷八三郎
14	佐藤庸男	関口尚利	鈴木竜生	菰田康雄	高橋定雄	印牧武次
15	鈴木信吉	田中康夫	関 重光	近藤忠男	寺崎洋一	小谷 章
16	鈴木富士雄	田村 昭	高上行雄	島 英雄	長島英太郎	国分八郎
17	関谷道春	戸渡民雄	館田 晟	鈴木秋雄	中森鎮雄	坂本龍雄
18	竹田凱光	中溝高好	高橋 窃	瀬戸口了	中山栄男	島津衿哉
19	田中芳郎	西村 稔	近末義弘	仙田岑生	西本昭夫	城 繁博
20	大東信祐	二宮隆弘	角田泰利	高橋久 夫	沼田良穂	高比康之
21	新島章一	原田育賜	成田 壮	田村秀明	野田重雄	高橋 清
22	浜野守也	平間洋一	中川 彪	塚田宣伸	袴田 宏	田中憲明
23	福田光信	福田茂記	長堀善松	中島傳吉	林長之助	中田光雄
24	福田 守	法性 弘	林 則行	中田悦己	平岡克躬	中島 晃
25	古木隆志	升水貞幸	藤井勝利	成田保夫	平山救馬	林 正弘
26	堀内強定	松尾捷太郎	藤吉圭四	林 繁	深野 俊	蓮見武男
27	真木博夫	松山圭一郎	堀之内洋一	林 嘉彦	福山重弘	馬場隆春
28	三好八州男	神子田正人	馬來基成	原 善昭	堀田恵彦	春山文雄
29	山本晃三	水上 勇	真木和男	牧 是清	松間昭雄	日高和重
30	矢吹 恒	水野智之	深山明敏	松本忠成	政狩圭亮	平田 侑
31	山下成元	森 洋	宮井達夫	水本幾男	村杉秀夫	松村嘉夫
32	山崎樹一郎	山県哲二	守屋 保	元島英海	元吉俊郎	水野雅章
33	吉田宏之	吉村浩二	山村安人	森 弘喜	矢吹隼人	三好聞治
34				吉沢鶴久		

健在率の比較

事務局

昨年の3月以降9名の同期生が逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。一期生の健在率は下表のごとく約60%で日本人男性の平均値の約53%より高い数値になっています。次ページに小隊別逝去・不明者名簿を掲載します。

会報36号（平成28年3月発行）

掲載以降の逝去者（平成29年1月末現在）

会員N O	区分	氏名	命日
273	海	元吉 俊郎	H28. 3. 12
192	陸	油井 碩也	H28. 3. 29
408	小	常本 省三	H28. 3. 31
28	陸	遠藤 了	H28. 6. 3
201	海	石川 昭	H28. 6. 24
238	海	田中 治	H28. 6. 28
88	陸	白木 弘敏	H28. 8. 1
240	海	田畑 一朗	H28. 8. 24
228	海	白石 洋介	H28. 11. 24

日本国民男子生存数・平均余命

（厚生労働省資料 H27 年）

年齢	生存数	平均余命
	(出生100,000中)	
80	62 644	8.89
81	59 606	8.32
82	56 325	7.78
83	52 819	7.26
84	49 110	6.77
85	45 223	6.31
86	41 199	5.87
87	37 110	5.47
88	33 022	5.08
89	28 984	4.72
90	25 040	4.38
91	21 236	4.08
92	17 681	3.80
93	14 438	3.55
94	11 551	3.31
95	9 045	3.09
96	6 923	2.89
97	5 174	2.71
98	3 771	2.53
99	2 676	2.37
100	1 847	2.23
101	1 238	2.09
102	804	1.96
103	506	1.84
104	307	1.73
105 ~	180	1.63

今までの逝去・不明者、健在者の数・比率等

区分	当初会 員数	逝去 者	不明 者	健在 者	逝去・ 不明者 率	健在 率
陸	196	57	6	133	32.1%	67.9%
海	82	36	2	44	46.3%	53.7%
空	60	27	1	32	46.7%	53.3%
小	16	9	1	6	62.5%	37.5%
計	354	129	10	215	39.3%	60.7%

入校時小隊別逝去・不明者名簿

H29.1.31現在

(但し、一期生会会員になっていない人は含まず)

11小隊		21小隊		31小隊		41小隊	
区分	氏名	区分	氏名	区分	氏名	区分	氏名
陸	石松 茂毅	陸	久我 幹生 (中村)	陸	遠藤 了	陸	國武 宮生
陸	小原 義造	陸	坂柳 成功	陸	山崎樹一郎	陸	瀬戸口 了
陸	前原 輝男	陸	竹内 俊	海	石川 昭	陸	塚田 宜伸
小	難波 清史	陸	新津 保義	海	伊東 靖郎	陸	牧 是清
小	松島 史尚	陸	西田 晃	海	久保 建二	陸	松村 忠成
	5名	陸	林 孝恒	海	鈴木 信吉	海	稲垣 厲
		陸	松浦 育郎	海	鈴木富士雄	海	近藤 忠男
		陸	油井 碩也	海	古木 隆志	空	伊藤 茂
12小隊		海	白石 洋介	海	山下 成元	空	島 英雄
陸	楠元 惇之	海	中津川秀明	空	青柳 隆郎	空	仙田 岑夫
陸	上瀧 巖	海	松本 克彦	空	江澤 陽二	空	高橋 久夫
陸	四宮 勝	空	鈴木喜一郎	空	福田 光信	空	田村 秀昭
陸	馬場 隆春		1 2名	小	佐藤 庸男	空	中田 悦巳
陸	渡邊 政直				1 3名	空	吉澤 鶴久
海	佐藤 正					小	大崎 皓
海	南任 靖雄	22小隊				小	成田 保夫
海	馬場 駿快	陸	上野 秋生	32小隊			1 6名
海	村上 好和	陸	北村 博	陸	石井 忠司		
海	米山 治道	陸	守屋 義弘	陸	香川 武瑛		
	1 0名	海	田中 治	陸	小出 知幸	42小隊	
		海	長谷 常俊	陸	佐々木 直	陸	伊藤 政美
		海	宮川 正四	陸	西村 稔	陸	近藤 一視
13小隊		海	山根 正和	陸	原田 育賜	陸	坂本 文雄
陸	小出 雄一	空	梅根佐久郎	海	升永 貞幸	陸	中森 鎮雄
陸	澤井 隆秀	空	小林 泰義	海	水上 勇	陸	西本 昭夫
陸	鈴木 英夫	小	櫻井 茂	海	山縣 哲二	陸	福山 重弘
陸	高橋 洋治	小	畑田 勲	空	田中 康夫	海	佐久間 一
陸	平井 進		1 1名	空	森 洋	海	佐藤 芳夫
陸	藤岡 隆				1 1名	海	元吉 俊郎
海	佐々木 良	23小隊				空	鹿島田 矩基
海	竹内誠一郎	陸	岡村 忠重	33小隊		空	寺崎 洋一
海	馬渡 利臣	陸	岡本 光正	陸	石山 晃	空	林 長之助
海	湯浅 彊	陸	鯉沼 義則	陸	小野 勇	空	平山 救馬
空	浦川 正	陸	杉浦満壽男	陸	小野寺 勇		1 3名
小	常本 省三	陸	園川 清	陸	河合 一郎		
	1 2名	陸	中部 普行	陸	倉蘭 貞夫	43小隊	
		陸	藤戸 誠三	陸	白木 弘敏	陸	石原 敬之
		陸	松山 省二	陸	林 則行	陸	大橋 丈夫
		海	田畑 一朗	陸	堀之内洋一	陸	小谷 章
		空	前田 武彦	海	住田 剛	海	大嶋 直光
		小	北原 明	海	高上 行雄	海	島津 矜哉
		小	山崎 秀夫	空	鈴木 龍生	海	中田 光雄
			1 2名	空	高野 博 (大江)	海	三好 聞知
					1 2名	空	石塚 鏡司
						空	尾坪 祐三
						空	林 正弘
						空	春山 文雄
						空	山中 龍雄 (坂本)
							1 2名
		合計 139名					

アサヒグラフ (昭和 28 年 6 月 3 日号)

竹 田 凱 光

先日の市一会の新年会で、今度の会誌は防大卒業 60 周年記念号とするとのことでしたので、役に立つかどうか分かりませんが、保安大学校開校直後を取材した「アサヒグラフ」(昭和 28 年 6 月 3 日号)を送ります。「カメラ保安大学校に入る」という記事が載っています。

当時、3 中隊の誰かが購入して回し読みしたあと(だからボロボロ)、たまたま小生の写真が載っているという理由で、「おまえにやる」と言われて預かった記憶があります。

終活で捨てる書類に分類していたのを引っ張り出しました。写真の質は良くないけれど、登下校の様子や、大食堂での食事の様子は珍しいのではないかと思います。点呼に駆け出す様子が制服なのは、ヤラセでしょうかね。



当時 定価 40 円



(このアサヒグラフは B4 版のため、A4 版の本会報に縮小して掲載すると、字が小さくなって読めなくなるので、一部の写真のみ次ページ以下に掲載します。 編集担当)

カメラ

保安大学校に入る

明日の保安隊、警備隊の幹部を養成する保安大学校が、神奈川県横須賀市久里浜に開設されて一ヵ月余。現在、新入学生四百名は、四個中隊、十二小隊の学生隊に編成され、かつての海軍工作学校兵舎を利用して全員寮生活、また保安隊久里浜駐屯地内の仮校舎へ通学、陸士・海兵の戦後版ともいえる環境の中で、新軍人への道を励んでいる。立襟でジャバラのついた紺色の短い上衣、桜の花の上に鳩のとまった帽章のついた制帽、これに短剣を吊れば全く昔の海軍兵学校を思い出させるのが、この大学生の制服である。はじめ一週間ほどは不安定な気分だったという学生達（平均年齢十九歳）が、今では総選挙による保守党の勝利にはつきりと支持を表明するまでになっている。教官の指導が漸進的な精神訓育を旨にしている、というのが現段階だが、学校組織の中で教務部（教養・専門両学課担当）に対して、訓練部の位置が重要視される所は、他の新制大学に見られない特殊学校としての面目はつきりと物語られている。なおこの官費学生に対しては、更に月三千円が手当として支給され、現在兵は卒業後の就職義務は強制されないとされている。



現在の大学は保安隊駐屯地隊と同居 学生は隊伍を整えて登下校の時 保安隊の門衛司令と歩哨に挙手注目の敬礼をする 学生達は来春四月久里浜小原台（八万一千坪）に予定されている新校舎に移転するのを心待ちにしている様だ

旧海軍時代から13年以上もコックをやつて来た随方は「現在の食事は マァ普の準士官と下士官兵との中間でしょうナ もとは一日 2,800カロリーでしたが 今は平均 3,200カロリー 贅沢な方ですよ」もつとも食事の仕方 内容について食欲の旺盛な学生の批判はまちまち



起床と同時に学生達は寝具をたたみ 床の靴までベッドにあげて外の点呼に出る 点呼後掃除がある 靴の手入 便所掃除はないが 土曜日には内外の大掃除 集団生活になすまない学生はここでも批判的だ「大学まで来て 掃除やらされるとは思わんでしたよ」



毎日の課業は午前六時半から午後三時半まで（土曜は半日）制服着用 貸与のスック製カバンに教材を入れて整列 校舎へ向う 夕食後に制限区域内の散歩はあるが 外出は日曜だけ 新制高校を出たばかりの年齢の学生にはこの日課は相当の負担の様である



《説明文》 幹部教育の趣旨から、学生への命令伝達には一週間交代で各学生が勤務する。毎土曜日の午後には上番下番の勤務学生が指導官の司会で批判会議をひらく。ここで民主的な発言が展開されるが、その目的の多くは学生の漸進的な精神訓育にあるようだ、この「勤務学生会議」が大学の一番の特色で、同席上の発言の一例（学生）「命令を強引にやれといわれますがわれわれ同年配の間ではとても自信がありません」という学生の悩みに対して、（教官）「命令と服従の関係については結論は出さない。これは諸君自ら悩んでもらいたい問題である」

小原台堡壘について

大 東 信 祐

京浜急行の馬堀海岸駅から防大に向かう道路が坂道にかかるころの右側に馬掘小・中学校があるが、ここは陸軍野戦重砲兵学校の跡であり、我々の学生時代には正門横に表門歩哨の哨所が残り、当時の兵舎が教室として使われており、道路から谷を挟んだ向こう側の小丘に当時の将校集会所の建物がそのまま残っていた。現在重砲兵会が建立した「陸軍重砲兵学校跡」の碑が建立されている。

当時、小原台は重砲兵学校の演習場として使用されており、個人的な事になるが、幹部候補生として重砲兵学校で教育を受けた私の叔父から当時の第二大隊のあたりに花立堡壘に近い規模の堡壘があった話を聞いた事があった。また、電気学館の西側の台端にあった鉄骨のアングルの柱が小原台での測角基準点であり、BOQ（当時）の手前にあったRC二階建ての建物が八八式海岸射撃算定具の教場であったという話を聞き、走水小学校と旗山崎との間の砂浜の海岸が三八野砲の射場で猿島方向を、台上に15加を据え、対岸の館山沖の浮島方向に射撃をした等の話を聞き現在との差異の大きさに驚かされた事があった。我々の学生時代は朝鮮戦争の気配がまだまだ生々しく残っており、旗山崎から対岸の富津方向に米軍の防潜網が設置されていた時代であった。

私どもは学生時代に寝室側の窓から花立堡壘の構造物を日夜眺めていたが、小原台堡壘については防大の施設建設の際に破壊埋設したという事をかすかに聞いたような気がするのみであった。

たまたま、軍事史学 2013 年 3 号（通巻 192 号）の「研究ノート」に防大の濱田秀氏が「東京湾要塞小原台堡壘の建設の経緯とその構造の検証」－発掘調査を契機として－という発表があり、また、小原台クラブ会報第 39 号（2015.12）に防大の横山久幸氏が「建学の精神と戦史教育」の中で小原台堡壘について触れている文章があったのでその要旨を紹介する。

日本における砲台の構築は、明治 7（1874）年の調査に始まり、①東京湾口、②紀淡海峡、③下関海峡、④豊豫海峡、⑤鳴門海峡が重視され、明治 12（1879）年に先ず観音崎の工事が開始され、明治 25（1892）年に小原台の工事を完了した。

注 この文章では「堡壘」、「砲台」の用語を次のように使い分けている。

「堡壘」とは、上陸して我が砲台の背面から攻撃する敵に対する背面防禦を目的とするものである。

「砲台」とは海正面の敵艦船を砲撃する任務を持つものを言い、陸正面・海正面両方に対処する任務を持つものを「堡壘砲台」としている。砲台そのものは、火砲を備え付けた砲座（狭義の砲台）及び弾薬庫・観測所・電灯所・掩蔽部（兵舎）その他の附属設備を総称した、堡壘施設もこれに準ずる。

東京湾口の「敵艦船の通航の途絶」のための施設としては

猿島堡壘団（猿島砲台）

走水堡壘団（走水砲台、走水高砲台、小原台（堡壘）砲台、花立台（堡壘）砲台）

観音崎堡壘団（第1～4砲台、南門砲台、三軒家砲台）

海堡団（第1～4海堡）

援助砲台（千代ヶ崎、富津元洲）

からなり、小原台堡壘は「閉鎖堡壘とし、走水南方の高地小原台の北端に設け、観音崎堡壘団及び走水砲台の背後防禦に任ず」とされていた。

なお、横須賀湾口防禦の目的は「横須賀長浦の両湾口を途絶し、且湾内の軍用諸建築物を砲撃せんとする敵艦の動作を妨害する」とされている。

日露戦争においては旅順攻撃のため小原台砲台の28糎榴弾砲等の火砲が搬出されていることも記録されている。

日清・日露戦争の後、「要塞整理」が行なわれ、横須賀湾口直接防備はその必要がないとして撤去を決定した、小原台堡壘は他の堡壘に先駆けて大正2（1913）年撤去が決定され、この際、備砲・格納庫及び監守宿舎は当分の間、防禦造営物に準じ従来の通り保存（後に走水兵舎敷地に移す）すること、および堡壘備え付けの兵器は堡壘外の適当な場所に格納する事等も決められた。

このように小原台堡壘の現役時代は1897年～1913年の16年間であった。

要塞の廃止ということで大正2年度の特別工兵演習の場として小原台堡壘は、対「壕」、対「坑道」による永久堡壘の攻防演習として使用されることとなった。この際、爆薬等の使用による小原台堡壘の破損については復旧しないという申し合わせを行なった。残念ながらこの「工兵特別演習」の資料は残されていない。

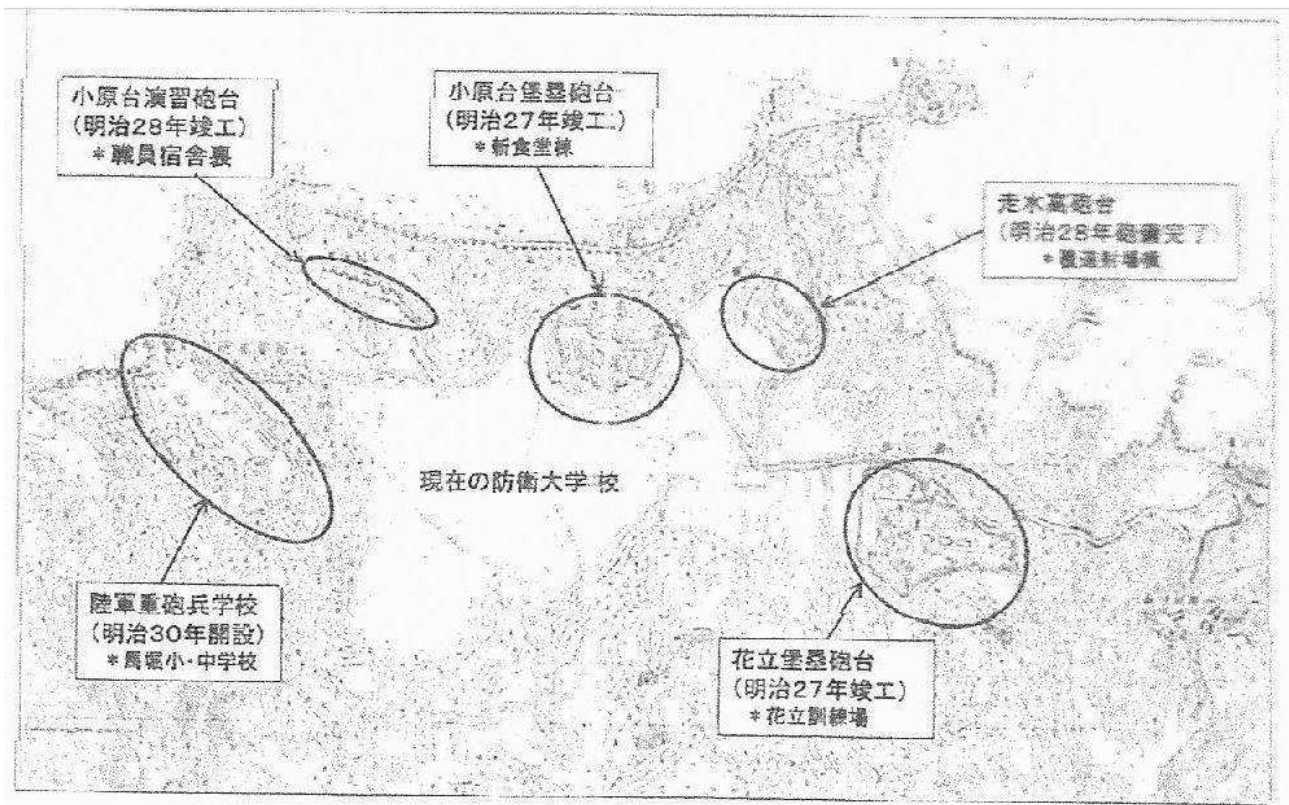
昭和29・1954年小原台に防衛大学校の施設が建設される事になり、これらの砲台群は小原台堡壘（昭和30・1955年）、花立堡壘砲台（昭和55・1980年）、走水高砲台（昭和55・1980年）の順に破壊されていった。なお、演習（小原台）砲台については28糎榴弾砲の砲座は撤去されたものの、12糎加農砲座は現在も良好な状態で残っている。

防衛大学校学生の生活中枢地域（学生舎、食堂、浴場、厚生施設）の再配置に伴う平成15（2003）年度以降の諸工事に伴う調査は、小原台堡壘の遺構を再確認するという

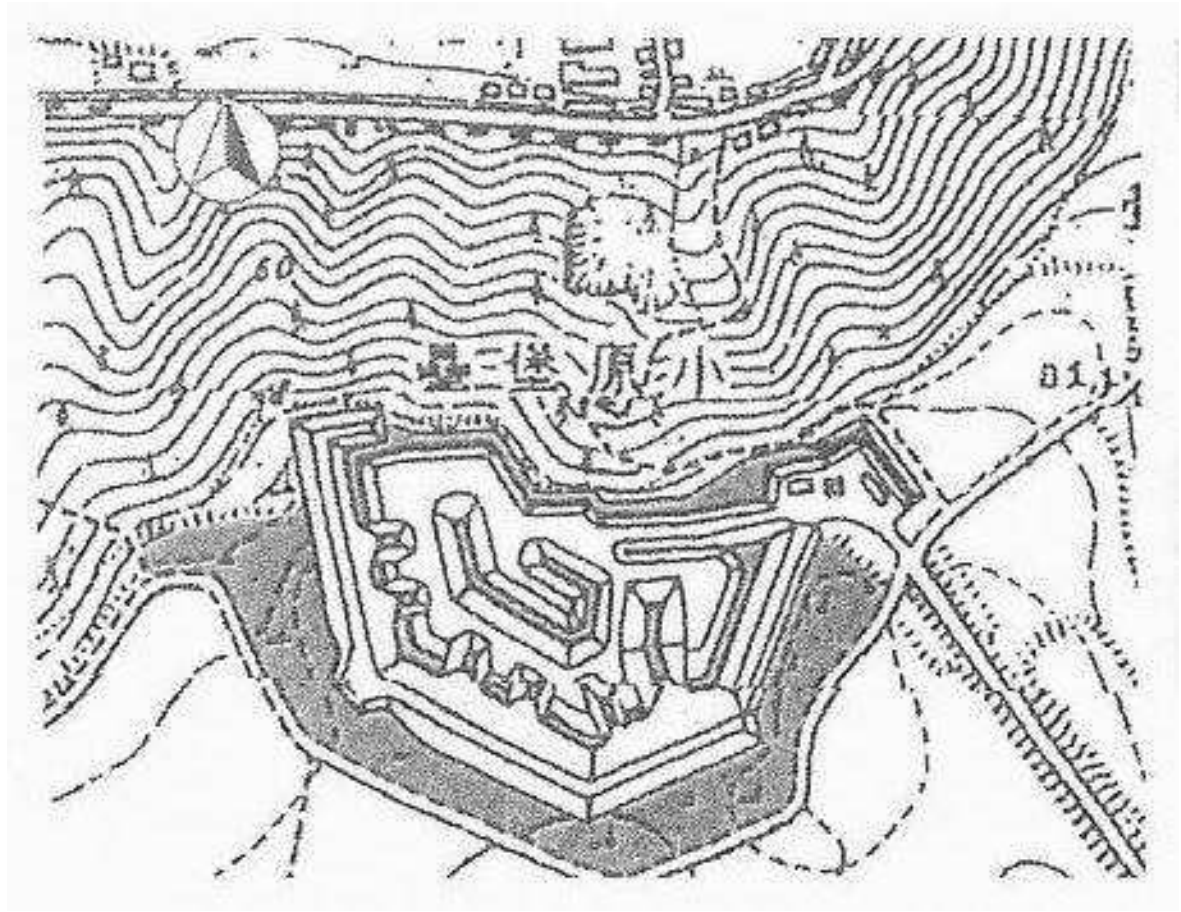
思わぬ副産物を生み出した。

これらの学校建設当初の工事では、地ならしがされ、棲息掩蔽部等はある高さ以上は切り取られ、埋められてその上に学校諸施設が建設されることとなった。これにより小原台堡塁の遺構は「消滅」したかには見えなかったが、堡塁の棲息掩蔽部、坑道、堀等地下構築物は、ある一定の深さより深い部分は埋められたため、その遺構は残存していることが判明した。

小原台地区の砲台群



小原台堡壘の概況



建設以来 100 年を経て実施された平成 23（2011）年からの工事に伴う近代埋蔵文化財の発掘調査において変則五角形をなしていた長大な壕や棲息掩蔽部、水利施設等の構造が明らかになり、また大正 2 年の工兵特別演習では堡壘の諸所に爆薬を仕掛け、爆破した跡が見られ、殊に坑道に対する爆破は徹底して実施されたことが伺われた。

小原台堡壘は短命な現役期間に加え、破壊により構築物の存立そのものも危ういものとなっていたことが判る。

これらの調査結果は防大の資料館に「小原台の歴史的概観」の一部として展示されており、横須賀市教育委員会編「横須賀市文化財調査報告書、第 4 2 集」及び公益財団法人かながわ考古学財団の「平成 24 年度発掘調査報告書」に記載されている。